

特集

インド福祉村ボランティア活動報告



アーナンダ病院近郊の村にて

日時 2018年5月19日(土)～5月26日(土)

場所 インド福祉村病院
(現地名:アーナンダ病院)
ウッタール・プラデーシュ州クシナガラ

▼参加メンバー

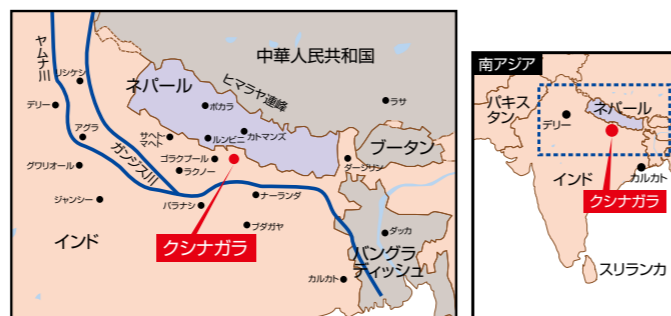
- 白井 秀明(さわらび地域包括支援センター 主任介護支援専門員)
- 船藤 悠太(福祉村病院 作業療法士)
- 鈴木 あきよ(第二さわらび荘 看護師)
- 浦野 いず美(あかね荘 支援員)

P8～P9
参加メンバーの
活動報告

▶ 気候

インドの気候は大きく「乾季」「暑季」「雨季」の3つに分かれ、5月は「暑季」にあたります。その名の通りインドで最も暑い時期にあたり、気温も40℃を越えてきます。あまりにも暑い為、学校も長期の休みに入ります。私たちが病院周辺の村落を訪れた時、子どもたちが沢山いたのはそういう理由だったようです。

●インド クシナガラ周辺の主要都市



▶ ボランティア活動日程

- 5月 19日(土) ●前泊
- 20日(日) ●日本出発～インド(デリー)到着
- 21日(月) ●デリー出発～インド福祉村病院到着。病院内をグプタ医師に案内してもらいました。
- 22日(火) ●インド福祉村病院周辺村落訪問。私たちが村内を歩いていると外国人が珍しいのか子どもたちがどんどん後ろについてきました。
- 23日(水) ●グプタ医師診療風景見学。一人で何十人もの患者を診察していました。
- 24日(木) ●ボランティア活動として病院待合室にて来院する子どもを対象に、動物の折り紙や新聞紙で作った兜などをプレゼントしました。
- 25日(金) ●インド福祉村病院出発
- 26日(土) ●日本到着



一緒に写真を確認



折紙の兜をプレゼント

▶ 活動に際して注意したこと

体調管理や食べ物、飲料水などには気を遣いました。ただ、インド福祉村病院には専属のクックがいて、写真のようなカレーを毎日美味しく頂きました。チキンカレー、鯖カレー、豆カレー、山羊カレー等日替わりでバリエーションも豊かでした。

また、インドにはコブラが出ると4月にグプタ医師が来日された時に話されていたので正直、怖い部分もありましたが実際にはコブラに遭遇することはありませんでしたのでホッとしました。





あかね荘 支援員 浦野いず美

ボランティア体験では実際に診察の様子を見せていただきました。現地の方の病気は様々で、糖尿病、精神疾患、外傷、火傷、食べ過ぎ、高血圧等などがありました。グプタ先生は1人で全ての患者を診察しておりグプタ先生の能力の高さに驚きました。病院のスタッフが近くの村を案内してくれました。すぐ近くには、カースト制の中の最も低い身分にも入らない不可触民の村もありました。このような人々にとって、カースト制度、肌の色、宗教で差別する事のなくどんな人でも手を差し伸べるインド福祉村病院はととても大切な存在だと感じました。

今回の訪問では、インド福祉村の現状や存在の大切さを学ぶことが出来ました。また、インドの人々の温かさ、生命力、活気を肌で感じました。インドではインフレが進んでおり物価も上がってきています。もちろん薬の値段も上がってきています。今後、インド福祉村を継続していくために自分に何が出来るか考えていく必要があると思います。そして、多くの人にインド福祉村の存在を知って頂きたいと感じました。また、機会があれば是非訪問したいと思います。



福祉村病院リハビリテーション部 作業療法士 船藤悠太

2018年5月22日から26日までインド福祉村アーナンダ病院へボランティアに参加させて頂きました。5月のインドは気温が40度を超え非常に暑い日が続きましたが、Dr.Guptaは早朝から夜まで休みなく診察されており、周囲の村の人々にとってなくてはならない存在だと思いました。Dr.Guptaの診察も見学させて頂きましたが、村の人々の経済状況等の理由から必要最低限の検査しか行えない中で、小児科が専門でありながら生活習慣から生じる疾患、様々な感染症、精神症状への対応等幅広く迅速かつ的確に診察されており医師としての技術の高さを感じさせて頂きました。また非営利活動法人のため通常の医師よりも低い報酬であるにも関わらず、地域の人々の事を第一に考え、医療に携わっている姿勢に大変感銘を受けました。

今回このような素晴らしい機会を与えて下さった医療法人さわらび会、快くボランティアを引き受けて下さったDr.Guptaはじめアーナンダ病院の職員の皆様、インド出発前からご支援下さった大竹常務理事に感謝申し上げます。





さわらび地域包括支援センター 主任介護支援専門員 白井秀明

前日に宿泊したデリーが東京のような都市部とすれば、あきらかに都会の喧騒とはかけ離れた場所にアーナンダ病院がありました。病院の門を抜けてすぐに病院名とともに YOUR PAIN IS OUR PAIN(あなたの痛みは私たちの痛みです)と書かれた看板があり、「良き医師は病気を治療し、最良の医師は病気を持つ患者を治療する」の言葉さながらのグプタ医師をはじめとする病院スタッフが懸命に働いている姿に感銘を受けました。

著しい経済成長を遂げているインドですが、同時に貧富の格差も広がっているようです。1950年制定のインド憲法により法律的にはカーストによる差別は禁止されたのですが、現実的にはそう簡単にはいかないのはこの国も同じなのかもしれません。

アーナンダ病院の存在意義はまさにそこにあり、その為には今後も病院に対する支援が求められます。一人一人にできることは小さなことでも力を合わせれば大きなものになります。まずは自分に何ができるか、何が必要なかを考えさせられました。

貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました。



第二さわらび荘 看護師 鈴木あきよ

貧困人口の高い、厳しい地に病院は建っていた。開院より20年の間に、保健衛生・生活改善により環境は整いつつあったが、昭和30年前半の日本の農村地帯にタイムスリップしたような光景だった。

差別(不可触民・ダリット)の残るこの地において、「アーナンダ病院」は、肌の色・身分・宗教など、全てに関係なく平等に医療が受けられる「駆け込み寺」のような存在であり、十分な医療機器・器材の整っていない中でグプタ医師は毎日多くの人々の診療を行っていて、「赤ひげ先生であり、スーパードクター」だった。

近年、高血圧・糖尿病・癌・メンタル面での患者が急増している中で、生活習慣病の予防対策・教育が急務な現状を知った。そして、さわらび会が遠い地において、壮大な計画に長期的に支援し続けてきた現状を直接見ることができ、支援の継続の重要性を痛切に感じた。

集落で逢った好奇心旺盛で輝いた目をしてきた子供達の未来の為に、身近な事から関わっていきたく思った。

